



HIROTTA KOINU
GA KERUBEROSU DESHITA

拾った子犬が
ケルベロス
でした

～実は古代魔法の使い手だった少年、

本気出すとコワイ(?)愛犬と

楽しく暮らします～

vol. **3**

Arai Ryoma
荒井竜馬

.. マーカス ..

教会幹部の一人。表向きは人格者として知られるが……

.. サラ ..

剣のみで戦う『純剣士』の女性。魔法が使えないことを負い目に感じている。

.. ソータ ..

失われた『古代魔法』の使い手の少年。現代魔法よりも高度な理論で、魔法を自在に操る。

.. ランスロット ..

タウロの街にやって来たイケメン冒険者。自分好みの美しい女性を厳選してパーティに誘っている。

.. カイン ..

ひりゅう つばさ
B級パーティ『飛龍の翼』のリーダー。新米冒険者の教育係を自認している。

.. ケル ..

地獄の番犬ケルベロス。見た目は可愛い子犬だがなかなか武闘派。時折その残虐性が垣間見えることも……

1 謎の男とケル小隊の活躍

——とある屋敷の薄暗い部屋の中。

六十代くらいの男が、骨董品の鏡の前で頭を下げていた。

マーカスという名のこの男は、銀髪で聖職者風の出立ちをしており、その装いから、それなりの地位についている者と分かる。

だが奇妙なことに、鏡に映っているのはマーカスの姿ではなく、この世のモノではない角が生えたバケモノだった。

「……ほう、それでは地獄の罪人をそちらの世界に呼ぶことには成功したか」

「はい。これも全てあなた様のおかげでございます」

どこからともなく重々しい声が響き、マーカスは恭しく頭を下げてそれに応える。すると、鏡に映る者がニヤツと笑った。

「罪人の召喚に成功したのなら、いずれ俺がそちらの世界に行くこともできるだろう。罪人を呼んだ奴は、確か……カインと言ったか？ 上手いこと誘導したのだな」

「お褒めにあずかり光栄でございます。カインは以前所属していた悪魔信仰の組織を見返したかったでしょう。少し助言をしたら、自主的に色々と動いてくれましたよ」

マークスは鼻で笑って、鏡に映る者にこれまでの経緯を説明した。

マークスはある目的に利用するために、悪魔信仰の組織を調べ上げていた。そこで目についたのが、カインという研究者の男だった。権力争いに敗れて組織を追いつかれたカインの傷心につき込み、マークスは彼が地獄の罪人を呼び出すように仕向けた。

悪魔信仰に必要な呪物、悪魔を呼び出す方法など、他者を通じて少しずつ知識を授けていった結果、カインはついに罪人の召喚に成功する。

彼は自分自身で悪魔を呼び出す方法を見つけたと思い込んでいるので、捕まった今でもマークスの手のひらの上で踊らされていたことに気づいていない。

そして、悪魔ではなく罪人を呼び出す方法を教えられていたとは、想像すらしていなかった。

「実行犯は捨て駒にした方がいいでしょう。私たちの存在を表の人間に知られては、後々面倒ですからね」

これまでの経緯を話し終えて、マークスは笑みを深めた。

「ふっ、人間にしてはなかなか狡猾だな。頭の切れる者は嫌いじゃない。その調子で俺の計画を進めてもらおうでしょう」

「はい。このマークスにお任せを」

鏡に映る者に対して、マークスは再度深く頭を下げた。

そこで、鏡に映る者が何か思い出したように声を漏らす。

「おっと……そうだった。伝え忘れていたが、そちらに送った罪人は、貴様の配下に置いておけ」

「え？ ぞ、罪人をですか？」

鏡に映る者の言葉を聞いて、マークスは分かりやすく取り乱した。

「ああ。罪人と言っても、そちらの世界の人間が束になっても敵わない力がある。今後のことを考えれば、ただ遊ばせておくには惜しい戦力だ」

「束になっても敵わない？」

マークスはカインの下に自分の部下を潜り込ませていた。

その者から罪人の召喚成功の報告を受けていたが、すでに連絡は途絶えており、カインも捕まっている。

カインがあっさり捕縛されたくらいだから、きっと召喚した罪人も大した力を持っていなかったのだろう。そう考えていたマークスは、鏡に映る者の言葉が理解できずにいた。

「その……罪人はそんなに強いのですか？」

「俺に比べれば大したことはないが、村一つ滅ぼすくらい造作もないだろうな」

「そ、それほどですか！」

マークスはドツと冷や汗を流す。単独で村を滅ぼすほどの戦力をあっさりと失ってしまったとい

う事実^{じじつ}に気づき、自分が大きな失態^{しつたい}を犯^かしたと悟^{さと}ったのだ。

「なんだ？ 何か問題^{もんだい}でもあるのか？」

「い、いえ！ 滅相^{めっそう}もございません！」

マーカスは真^まつ青^{あお}になつた顔を隠^{かく}すように、深く頭^{かぶ}を下^{くだ}げる。

本当^{ほんとう}のことを言^いつたら自分の命^{いのち}が危^{あや}ない。

そう考えたマーカスは、罪人^{つみびと}の消息^{しそく}が掴^{つか}めない事実^{じじつ}を隠^{かく}すことにした。

マーカスの態度^{たいど}を怪訝^{けげん}に思^{おも}いながらも、鏡^{かがみ}に映^{うつ}る者は話^わを続^{つづ}ける。

「まあ、貴様^{きさま}のことだ。すでに罪人^{つみびと}を配下^{はいか}に置^おいているのかもしれんな」

「ハッ、ハハハ……！」

マーカスは曖昧^{あいまい}な笑^{わら}い声^{こゑ}で誤魔化^{ごまか}そうとするが、緊張^{きんじやう}のあまり声^{こゑ}がうわずってしまった。不自然^{ふしぜん}な笑^{わら}い声^{こゑ}を漏^もらすマーカスを見て、鏡^{かがみ}に映^{うつ}る者は目^めつきを険^{げん}しくした。

「……マーカス。くれぐれも、俺^{おれ}の期待^{きたい}を裏切^{うら}切るような真似^{まね}はするなよ」

鏡^{かがみ}に映^{うつ}る者は、最後に低^ひい声^{こゑ}でそう言^いってから姿^{すがた}を消^けした。

マーカスはしばらくの間^{かん}プルプルと震^{ふる}え、鏡^{かがみ}の隣^{となり}にあつた壁^{かべ}を強^{つよ}く殴^うった。

「くそっ！ 何^{なに}が期待^{きたい}を裏切^{うら}切るんだ。偉^偉そうに言^いいやがって……」

マーカスは近くにあつたソファ^{ソファ}に乱暴^{らんぼう}に座^まると、苛立^{いらだ}たしげに髪^{かみ}をバリバリと搔^かく。

そこで扉^{かど}をノックする音^{おと}が部屋^{へや}に響^{ひび}いた。

マーカスが返事^{こたへ}をすると、フードを深く被^かつた男^{おとこ}が入^いってきた。

フードの男^{おとこ}はマーカスの側^{そば}で片膝^{ひかひざ}をついて口^{くち}を開^{ひら}いた。

「マーカス様^{さま}。カインに關^{かん}すること、新^{あらた}たに分^わかつたことがあります」

「なんだ？ 言^いつてみる」

マーカスが促^{うなが}すと、フードの男^{おとこ}は頷^{うなづ}いて続^{つづ}ける。

「カイン及び悪魔^{あくま}信仰^{しやうぎやう}の組織^{そくし}の制庄^{せいさう}に、憲兵^{けんぺい}以外の者^{もの}が關^{かん}わつていたようです」

「憲兵^{けんぺい}以外^{いがい}？ 教会^{きやうかい}關係^{けんが}者^{もの}か？」

マーカスは眉間^{みけん}にしわを寄^よせ、厳^{げん}しい目^めつきで尋^{たず}ねたが、フードの男^{おとこ}は首^{くび}を横^{よこ}に振^ふる。

「いいえ。タウロの街^{まち}の冒険^{ぼうけん}者^{もの}ソータと、そのパ^パーティです」

「ソータ？ 聞^きかない名前^なだな」

マーカスは顎^{あご}に手^てを置^おいてしばらく考^{かんが}えてから、ため息^{ためいき}交^かじりにフードの男^{おとこ}に視線^{しせん}を戻^{かへ}した。

「その冒険^{ぼうけん}者^{もの}について、何^{なに}か分^わかつていることは？」

「噂^{うわさ}程度^{ていど}ですが、古代魔法^{こくたいまほう}を使^{つか}うらしいです」

「古代魔法^{こくたいまほう}!？」

マーカスはソファ^{ソファ}から勢^{いき}いよく立ち上^あがった。

「今の時代^{じこのじだい}に古代魔法^{こくたいまほう}を使^{つか}える者^{もの}がいるのか？ ん？ 古代魔法^{こくたいまほう}？」

マーカスは引^ひつ掛^かかりを覺^{おぼ}えて、しばらくの間^{かん}腕^{うで}を組^{くみ}む。そして、ハッと何^{なに}かに氣^きづいたように

顔を上げた。

「なるほど。その噂の真相は調べなくてはならんな」

「マーカス是不敵な笑みを浮かべると、身支度を済ませて部屋を出ようとした。

突然どこかへ行こうとしているマーカスを、フードの男が呼び止める。

「マーカス様、どちらへ？」

「そのソータという奴を調べてくる」

「マーカス様自ら向かうのですか？」

「ああ。お前たちに任せておいたら心許ないのな」

「マーカスは笑みを深めてそう言うと、フードを深く被った男を残して部屋を出ていくのだった。



「ソータくん、ちょっといいですか？」

「はい？」

冒険者ギルドを訪れていた俺——ソータは、ギルド職員のエリさんに声をかけられた。

なんだろうと考えていると、彼女はカウンターのの上に一枚の依頼書を置いた。

「ソータくん宛に、依頼書が届いたんですよ」

「俺宛って、名指しの依頼ですか？」

思いもしなかった言葉に、俺は目を丸くする。

名指しの依頼というのは、特定の強い冒険者や、信頼関係を築いた冒険者に依頼したいという場合に使われる手段だ。

だから、普通はある程度名が知られた冒険者にしか来ない。

でも俺と純剣士じゅんけんしのサラさんとケルベロスのケルで組んだパーティはまだC級で、強さや知名度は大したことはないし、特定の顧客と信頼関係を築いた記憶もない。

だから、なぜ俺たちに名指しの依頼が来たのか分からずにいた。

「ソータくんたちの活躍が徐々に広まってきたのかもしれないね」

エリさんはふっと嬉しうれそうに笑った。

俺は少し考えてから首を傾げる。

「俺たちって、名指しの依頼を受けるほどのことをしましたっけ？」

「……ソータくん、それ本気で言ってます？」

俺が頷くと、エリさんはため息を一つ吐いた。

それから、彼女は指折り数えはじめる。

「ゴブリンの群れの撃退及びゴブリンロードの討伐、悪魔教の制圧に大悪魔の討伐。有名にならな

い方が無理ですよ」

「エリさん。それ、大悪魔じゃなくて地獄の罪人ですよ」

少し前に、俺たちは悪魔教の組織と一戦交えた。

そのとき、悪魔教が呼んだ大悪魔と戦うことになったのだが、蓋を開けたらそいつはただの地獄の罪人だったのだ。

俺がそんなことを思い出しながら言うと、エリさんは小さく首を横に振る。

「それでも、凄いことをしてるんですよ。ソータくんは、自分がしたことこの価値をもっとちゃんと理解した方がいいですって」

エリさんが目尻を下げて笑うと、ケルがカウンターの上に跳び乗った。それから、ヘッヘッと子犬のような息遣いで依頼書を覗く。

「着実に成り上がりの道を進んでいるではないか」

すると、俺の隣にいたサラさんも髪を耳にかけて依頼書を覗き込んだ。

「まさか、名指しの依頼を受ける日が来るなんてね。少し前には想像もしなかったよ」

「確かに、考えられなかったですよね」

サラさんと俺は、どちらもパーティを追放された冒険者だった。

そんなはみ出し者の俺たちが一緒に組んで、功績を上げるようなパーティになるなんて、誰も思わなかっただろう。

「それで、どんな依頼なんですか？」

俺は二人に倣って、依頼書に目を落しながら、エリさんに尋ねた。

「依頼は教会からです。イエローベアーの討伐と書いてあります。どうやら、複数体いるみたいですね」

「教会からの依頼ですか。あつ、ということは、ロインさん繋がりがりかな？」

ロインさんというのは、ラエドの街に大きな教会を持つ神父さんのことだ。

悪魔教と一戦交えることになったのも、彼から悪魔教について調べてほしいと言われたのが始まりだった。

もしかしたら、そのときのお礼も兼ねて依頼を回してくれたのかもしれない。

それでもなければ、俺たち以外でも解決できそうな依頼を、名指しで頼んだりはしないだろう。依頼の達成報酬を確認して、なんとなくそんな気がした。

「ふむ、イエローベアーか」

ケルが依頼を確認してそう呟いた。それから少しして、俺の方に顔を向ける。

「ソータよ。試したいことがあるのだが、よいか？」

「試したいこと？」

「ああ。この依頼、『ケル小隊』に任せてみようと思う」

ケルは得意げにニツと歯を見せて笑みを浮かべる。

すると、タイミングよく冒険者ギルドの扉が開いた。

「[[[[キャンッ!]]]]」

そして、扉の先には五体のハイエナジャガーがいた。

イヌとヒョウを合わせたような魔物で、サイズは中型犬くらい。まだら模様の体毛と、少し広がった形の耳が特徴的だ。

今は使い魔だと分かりやすくするために、緑色の目立つ服を着せられている。

五体が何も着けずに街中をぞろぞろと歩いていたら、野生の魔物だと勘違いする人もいるかもしれないので、ケル小隊には服を着てもらうことにしたのだ。

「なるほど、ケル小隊に手伝ってもらうのか」

「ふむ。少しずつではあるが、我が鍛えて^{きた}いるのだ。せつかくイエローベアーがいるのなら、この者たちに経験を積ませたくてな」

俺とケルが話していると、ハイエナジャガーたちがトテッ^とと近くにやってきた。

ケル小隊というのは、ケルの使い魔のようなものだ。

彼らは悪魔教の手によって改造されて、無理やり言うことを聞かされていたところ、ケルが命令権を上書きして命令を聞かなくなっているようにしてあげた。その結果、彼らは自らケルの眷属^{けんぞく}になることを選び、ケル小隊として色々と働いてくれるようになったのだ。

「確かに、ケル小隊って強いし、任せられるかもしれないね」

俺がそう言うと、エリさんがカウンタ^ーから出てきて、ケル小隊を優しく撫^なでてくれた。

「ケル小隊はギルドの手伝いも色々やってくれているんですよ。最近、夜の街の警備とかもしてくれま^すし、すっかりこの街のマスコッ^トですよ」

「キャンッ、ヘッヘッ」

撫でられたハイエナジャガーは嬉しそうにお腹を見せ、他のハイエナジャガーたちもエリさんに群がる。

俺も近くに来た一体を撫でてあげると、嬉しそうに尻尾を振った。

悪魔教に改造された魔物……っていうより、人によく懐^{なつ}いている中型犬にしか見えない。

すると、ケルが俺のもとに近づいてきて、ニパツと笑った。

俺はそれに釣られて笑いながら続ける。

「それじゃあ、今回はケル小隊に任せてみようか。俺たちは後ろからついていく感じで」

「ふむ。それが良いな」

俺が頭を優しく撫でてやると、ケルは心地よさそうに目を細める。

地獄の門番のケルベロス……というか、可愛^{かわい}い子犬にしか見えないんだよなあ。

俺はケルとケル小隊のモフモフを堪能してから、冒険者ギルドを出た。

ケルが鍛えたというケル小隊の実力は、一体どれほどなのかな？

そんなことを考えながら、俺はケル小隊を連れてイエローベアーがいるという場所へと向かうことにした。



依頼書に書かれていた場所に向かう道中、あまりにも手持ち無沙汰だったので、俺は考えていたことをそのまま口に出した。

「ケル小隊、強すぎない？」

途中で魔物が出てくる度にケル小隊が全て倒してくれた。

そのおかげで、俺たちはただ山奥を歩いているだけになっていた。

ケル小隊は俺たちの前に三体、俺たちの後ろに二体と分かれていて、どこから魔物が来てもすぐに倒してくれる。

名指しの依頼なのに、これでいいのかな？

「確かにケル小隊強すぎるね。前に戦ったときは本気じゃなかったのかな？」

サラさんも俺と同じことを思っていたのか、こくと首を傾げた。

以前、俺たちは悪魔教に操られていたハイエナジャガーたちと戦っている。

だから、強さを把握しているはずだったのだが、そのときと比べて彼らは数倍強くなっている。ケルが訓練しているにしても、強すぎる気がするんだけど。

すると、前を歩くケルがこちらを振り返る。

「いや、前に戦ったときも本気だったと思うぞ。今は私の眷属になっているからな。強いのは当然なのだ」

「そういえば、正確には使い魔じゃなくて眷属なんだっけ？ どう違うの？」

「ふむ。眷属になると、私の力の一部を与えることができるようになる」

「え!? ケルの力の一部を？」

さらっと言ったケルの言葉に驚き、声が裏返った。

ケルの見た目は可愛らしい子犬そのものだが、実際は地獄の門番ケルベロスだ。その力の一部を魔物に与えてしまつて、問題ないのだろうか？

「それって、大丈夫なの？ その、色々……」

「何も問題あるまい。少し強くなりすぎたハイエナジャガーが数体いるだけだからな」

「それが問題な気もするけど……まあ、人に危害を加えることはなさそうだし、大丈夫なのかな？」
俺は先頭を歩く三体のハイエナジャガーたちを見る。

リズミカルに尻尾を振って歩く彼らの姿は、とてもじゃないけどケルベロスの力の一部を与えられた魔物とは思えない。

物を投げたら喜んで取ってきそうなくらい、犬っぽい。

エリさんの話では、ケル小隊は街の人と上手くやっているみたいだし、力を有効活用していると
思えば悪いものではないか。

そんなことを考えていると、俺の『魔力探知』に反応があった。

同時に、ケルの体がピクンと動く。

「ゾータよ。気づいたか？」

「うん。魔物が数体——いや、十数体か」

最初に『魔力探知』に数体の反応があったと思ったら、それに続くようにいくつもの反応が現れた。

そろそろイエローベアーと遭遇するかもしれないと思っていたが、奴らはこんなに大きな群れを作ることはない。

そうになると、この反応は別の魔物かな？

「キャンツ、キャンツキャンツ」

すると、ケル小隊も魔物の接近に気づいたのか、鳴き声で意思疎通を図ってフォーメーションを変えた。

そんなケル小隊を見て、サラさんが剣の柄に手をかける。

「ゾータ、魔物が現れたのかい？」

「はい。こっちに向かってきています。十数体いるので、イエローベアーではないと思いますけど」

「十数体……群れを作る魔物か、厄介そうだね」

俺は頷いてから、魔物が来る方角を見て構える。

すると少しして、ケルが「ほう」と声を漏らした。

俺が首を傾げていると、すぐに魔物たちの姿が見えた。

「え!? イエローベアー?」

俺たちに向かってきている魔物は、依頼書に書かれていた魔物そのものだった。

金色の体毛を生やし、大柄な成人男性ほどの体格をしている獰猛な魔物。そんな魔物が十数体の群れを作って、こちらに突っ込んでこようとしていた。

「少し様子がおかしい気がするね」

「ですね。どこか普通じゃない感じがします」

サラさんの意見に、俺も同意を示す。

イエローベアーたちは、涎を垂らしながら一心不乱にこちらに向かってきていた。

奴らが獰猛なのは知っているが、ここまで暴走気味に突っ込んでくるというのは聞いたことがない。

「ケル、思った以上にイエローベアーの数が多いし、様子もおかしい。みんなで手分けして倒そう」

山に入る前から、ケル小隊を含めたみんなに支援魔法を重ねがけしてある。だからこのまま戦闘に入っても問題はないはずだ。

しかし、ケルは小さく首を横に振る。

「いや、ソータよ。ここはケル小隊に任せてくれ」

ケルがなんでもないのでそう言ったので、俺は目をぱちくりとさせる。

「え？ でも、この数だよ？」

イエローベアーとハイエナジャガーでは、強さのレベルが違う。

ケルの力の一部を与えられているとはいっても、この状況でケル小隊が勝てるようには思えない。そんな俺の心配をよそに、ケルは特に慌^{あわ}てることなく答える。

「ふむ。このくらいなら問題はあるまい」

それから、一歩前に出て続ける。

「行け、ケル小隊！ 三十秒で撃退せよ！」

「[[[[キャンッ！]]]]」

ケルの号令を聞いて、ケル小隊がイエローベアーの群れに突っ込んでいった。

俺も参戦した方がいんじゃないかと思い、いつでも魔法を使えるように手のひらをイエローベアーに向ける。

そのとき、ケル小隊のうちの一体がイエローベアーの首を噛^かみちぎった。

「ガアアア!!」

「[「……え？」]

イエローベアーの悲鳴を聞いて、俺とサラさんは揃って間の抜けた声を漏らす。

すぐに他のハイエナジャガーたちも、イエローベアーの急所に食らいついて、強引に肉を噛みちぎっていった。

「ガ、ガアアア！」

「ガアッ！」

「ガ、ガッ……」

イエローベアーたちはケル小隊の連携によって次々と倒されていく。

気づけば十数体いたイエローベアーは、残りわずかになっていた。

「キャンキャンッ！」

「ガアアア！」

それから、ケル小隊は残ったイエローベアーを倒して、ケルのもとに駆け寄った。尻尾をフリフリと振っている様子は、ご主人に褒めてもらいたがっている中型犬にしか見えない。

「ふむ。悪くない手際^{てぎわ}だ。今後^{はげ}も訓練に励むように！」

「[[[[キャンッ！]]]]」

ケルの言葉を聞いたケル小隊は、ウキウキした様子でイエローベアーの解体を始めた。

「イエローベアーが、ハイエナジャガーたちに蹂躪^{じゅうりん}された？」

「なんか凄いものを見たような気がするよ」

俺とサラさんは信じられない光景の前に、そう呟いた。

ケルの眷属として力の一部を与えられ、訓練を受けた結果、ケル小隊はハイエナジャガーとは思えない強さを手にしていた。

……本当に、こんなに強いハイエナジャガーたちがいて、問題ないのだろうか？

あれこれ考えていると、ケルが一体のイエローベアーの足をぐにぐにと押しながら、こちらに顔を向けた。

「やはり、ソータとサラが睨んだように、普通のイエローベアーではないな」

「もしかして、カインの実験体かな？」

俺たちを襲ってきたイエローベアーの獐猛さには、覚えがあった。以前カインの実験体と戦ったときと凄く似ている。

「ふむ。その可能性は十分にあるな……ん？」

頷いていたケルが、突然遠くの方を見つめた。俺もその視線の先を追うが、特に何も見当たらない。

「ケル？」

「どこから見られている気がするな」

「見られてる？」

気になって、俺はケルが見つめている方向を『魔力探知』で探してみる。

「ケル、『魔力探知』に反応はないみたいだけど」

「そうか。なら、気のせいかもしれないな」

ケルは小さく鼻を鳴らして、視線を俺たちに戻した。

うん、そうだよね。

こんな山奥にいる俺たちのことを見ている人なんて、いるはずがない。

そう結論付けた俺たちは、ケル小隊がイエローベアーの解体を終えると、タウロの街に戻ることにした。



——とある宿の一室にて。

手鏡に映るケル小隊とイエローベアーとの戦いを見ていたマークスは、動揺していた。

「な、なんなんだ、あのハイエナジャガーは」

それから、マークスは髪をガシガシと掻き乱す。

「せっかく、カインの研究所から盗んでおいた魔物を使ったのに、これでは意味がないじゃないか！」

マークスは教会の名前を使ってソータたちに名指しの依頼をした。

古代魔法を本当に使うのか確かめるために、改造されたイエローベアーと戦わせようとしたのだが、思惑通りにはいかなかった。

結局、イエローベアーたちはケル小隊に全滅させられてしまった。

「あんな強いハイエナジャガーは知らんぞ。カインの改造体……いや、それにしても強すぎる。それ以前に、あの少年はティマーなのか？ そんな情報はなかったはずだぞ」

マーカスが知っている情報は、ソータが古代魔法を使うこと、パーティには純剣士の女がいること、それとなぜか子犬を連れてきているというものだけだった。

だから、ケル小隊が依頼を片づけてしまうなんて想定していなかった。

マーカスは頭を抱える。

「いや、ティマーだとしても、普通はあれだけの数の魔物を一度に使役できるはずがない。古代魔法を用いたティム？ いや、それだとしても納得できないことが多すぎる」

マーカスはケル小隊がケルの眷属になっているという情報を知らない。それゆえに、普通ではないハイエナジャガーの強さが理解できずにいた。

ソータの力を調べるために自ら動いたというのに、分からないことが増えてしまった。

そんな事態にマーカスは頭が追いつかなくなってしまった。

それから、彼は手鏡に映っていたケルのことを思い出す。

「黒い子犬がこつちを見ていた気がしたが……まあ、気のせいだろう」

マーカスは特殊な力を持つ鏡を数多く持っていた。

今回使った呪物は、特定の対象者の行動を監視するものだった。

その鏡を通して、マーカスはイエローベアー周辺の映像を見ていたのだが、これはあくまで一方的な監視のアイテムなので、こちらの存在がバレるはずがない。

マーカスは懸念を振り払って、次の作戦を立てる。

「もっと調べなくてはならんな。そのためには、協力者が必要か」

そう考え、マーカスはタウ口の街へと向かった。

使えそうな人間——カインの代わりになる捨て駒を求めて。

2 B級冒険者の洗礼

名指しの依頼を無事達成した数日後。

「ソータくん、サラさん！ 今日をもって、二人をB級冒険者とします！」

冒険者ギルドの応接室に呼ばれた俺とサラさんは、満面の笑みを浮かべるエリさんにそう告げられた。

テーブルを挟んで俺たちの向かいには、エリさんとギルド長のハンスさんの姿があった。

驚きすぎて、俺は一瞬なんのことか分からなかった。

ようやく言葉の意味を理解した俺は、エリさんに聞き返す。

「ほ、本当ですか？」

「はい。少し遅くなっちゃいましたけどね。改めて、昇格おめでとうございます」

改めてエリさんにそう言われて、俺はガッツポーズをする。それから、隣に座るサラさんの方に目を向ける。

「やりましたね、サラさん！」

「そうだね、ソータ。なんというか、いまいち実感が湧かないけどね」

サラさんは嬉しそうに口元を緩めながら、頬を掻いていた。

確かに、急にB級になりましたと言われても、実感は湧かない。

そう考えていると、俺の膝の上に乗っているケルがこちらを向いた。

「やったではないか。着実に成り上がっていつているな。まあ、ソータとサラならA級に上がるのもすぐだと思いがな」

「さすがにそれは気が早いって」

俺はケルの頭を撫でながら笑う。

さすがにそんなぼんぼんと冒険者ランクが上がっていくことはないだろう。

サラさんもそう思ったのか、俺と同じように笑っていた。

しかし、ハンスさんとエリさんは真面目な顔をしていた。

「いや、ケルの言う通りかもしれないぞ」

「そうですね。十分にあり得るんじゃないかと」

二人の顔がやけに真剣だったので、本当に近いうちにA級冒険者になる日が来るのかもしれないと考えてしまう。

いや、それはさすがに調子に乗りすぎかな。

俺が自分を戒めていると、エリさんが思い出したように一枚の紙を机の上に置いた。

「ソータくん、サラさん。せっかくB級冒険者になったので、こんな依頼を受けるのはどうですかね？」

俺は依頼書を覗き込み、そこに書かれている内容を読む。

「これは、複数のパーティで受ける依頼ですか？」

「はい。相手が相手ですので、この依頼は複数のパーティで協力をしてもらおうと思ひまして」そこに書かれていたのはストーンゴリランという魔物の討伐依頼だった。

ストーンゴリランは成人男性の二、三倍の大きさをしたゴリラのような魔物だ。二本の角が生えており、尻尾の先が石のように硬いのが特徴だ。

厄介なことにこのストーンゴリランは、バイオレットサルンという魔物の群れを率いている。

そのため、討伐するときはバイオレットサルンの大群も相手にしなくてはならない。

群れの規模にもよるが、複数パーティで挑んだ方がいいというのも頷ける。

俺がそう考えていると、エリさんは続ける。

「今後、パーティ間で協力することも増えてくると思います。そのときのためにも、顔馴染を増やせるこの依頼は、良いんじゃないかと思ひまして」

「なるほど。確かに一理ありますね」

俺たちは他のパーティとの繋がりがほとんどない。

今後、複数のパーティで依頼を受けることもあるだろうし、この機会に他のパーティと関わりを

持つのもいいかもしれない。

俺はそう考えて、サラさんを見る。

「サラさん。この依頼を受けてみたいんですけど、いいですか？」

「そうだね。私も受けておいた方がいいと思う。他のパーティへの挨拶も含めてね」

サラさんは小さく笑ってそう言った。

俺たちが依頼を受ける旨をエリさんに伝えると、彼女は今回の依頼に参加する他のパーティのプロフィールや実績などを見せてくれた。

俺がそれらの書類を見ていると、隣でケルもやけに熱心にその書類に目を通していた。

何か気になることもあったのかな？

「ふむ……臭うな」

「臭う？」

俺が尋ねると、ケルはばあつと顔を輝かせて振り向く。

「我もこの依頼を受けるのに賛成だ。仄かながら、香ばしい臭いがする」

「香ばしい臭い……」

ケルは急に上機嫌になり、嬉しそうに『飛龍の翼』というパーティのプロフィールや実績などを読み込んでいた。

ただ何度読み返しても、俺にはケルが上機嫌になった理由が分からなかった。



所変わって、タウロの街の宿の一室。

B級冒険者パーティ『飛龍の翼』のメンバーが、明日のストーンゴリランの討伐依頼について話し合っていた。

『飛龍の翼』は三十代後半のメンバーで構成されている、万年B級止まりの古株冒険者の集まりだった。

歳と共に動きにキレがなくなってきたが、これまでの実績からギリギリB級冒険者パーティとして活動できていた。

『飛龍の翼』のリーダー、スミスは不機嫌そうにグラスをテーブルに置く。

「明日の依頼、B級になったばかりの冒険者パーティが交ぜるらしいな」

すると、パーティメンバーの女冒険者のアリサがわざとらしく驚く。

「へえ、そんなパーティがいたんだ。ねえ、挨拶にも来ないって、おかしくない？」

「期待の新人らしいじゃないか。それなら、俺たちが教育してやらないとな」

アリサに続いて、もう一人のメンバーの男、タリンが言った。

二人の言葉を聞いたスミスは不敵に口元を緩める。

「ああ。先輩を敬えないような奴は、ちゃんと教育してやらないとな」

『飛龍の翼』は、勝手に自分たちをタウロの街の冒険者の教育係だと思い込んでいた。

彼らは年長者で、それなりの冒険者ランクであるおかげで、周囲に気を遣われている。その結果、何を勘違いしたのか自分たちが偉くなったと思いがついていた。

本当はただ誰も注意できなくなって、老害と化してただけだというのに、それに気づいていない。

そして、そんな自分たちよりも若くて、これから活躍しそうな冒険者たちを妬み、いびるようになった。

タリンはぐっとグラスを傾けながら続ける。

「そういえば、前にも同じような奴らがいたよな？」

「ああ。いたな。どうやら、今は冒険者を休業しているらしい」

スミスの言葉を聞き、タリンは噴き出すように笑う。

「どうやって、まるで他人事だな」

「先輩の荷物を全部持たせたり、道中で遭遇した全ての魔物の相手をさせたりしたただけぞ。あとは、数時間説教をしたり、何度かぶっ叩いたりしていたただけか？」

スミスがわざとらしく首を傾げてきょとんとした顔でそう言つと、今度はアリサが噴き出す。

「最近の子はストレスに弱いね。まさかそれだけで調子を落とすっちゃうなんて」

話題になっているB級パーティは、スミスたちの新人いびりを受けて、心身共に深い傷を負ってしまった。

しかし、冒険者ギルドはこの事実を知らない。

もしも若手パーティがスミスたちの悪行^{あくぎょう}を冒険者ギルドに報告したら、もっと酷い扱い^{ひど}を受けるのは目に見えているし、仲間外れにされて他の冒険者の協力を得にくくなる。そうなったら、タウロの街で冒険者として活動していくのは難しい。

そうなることを恐れて、誰も冒険者ギルドに本当のことを報告できないでいた。

こうやって目をつけたパーティを追い込んでいる一方で、スミスたちは表面上は良い態度で冒険者ギルドに接している。

そんな状況もあって、彼らの陰湿な悪行は冒険者ギルドにバレていないのだ。

スミスは心地よさそうにグラスを傾ける。

「新人パーティがどこまで耐えられるか、楽しみだな」

すると、アリサが思い出したように続ける。

「でも、今度の奴らって結構強いんでしょ？ 古代魔法を使うとか聞いたことがあるけど」

すると、スミスはぶるぶると肩を震わせて噴き出した。

「ふふふっ、アハハ！ そんなの嘘^{うそ}に決まってるんだろ！」

タリンも同じように笑いながら続ける。

「とんでもない嘘つきだな。そこも含めて、教育してやらないとな」

部屋の外に漏れるほどの笑い声が響く中、コンコンツと扉をノックする音が響いた。

それを聞いて、三人はピタッと笑い声を止める。

スミスたちは自分たちがいびっている者たちを除いて、良識のある冒険者として通っている。

だから、来訪者に下品な笑い声と新人いびりの話題を聞かれるわけにはいかないのだ。

それから、タリンはゆっくりと扉を開ける。

すると、そこには見慣れない銀髪の聖職者風らしき男の姿があった。

スミスは振り返って他の二人の知り合いか確認するが、アリサたちは首を横に振った。

それから、スミスは人のよさそうな感じで尋ねる。

「えっと、どなたかな？」

「取り繕^{ととろ}う必要はない。全て聞こえていた」

聖職者風の男が短く言っと、スミスの表情ががらっと変わった。スミスはどこか冷めた目で訪問者を見る。

「……なんの用だ？」

「ただの忠告と、協力の申し出だ」

「忠告？ お、おいつ」

聖職者風の男はスミスの許可も得ずにくずくずと部屋の中に入った。

それから、ポケットから赤黒い十字架が描かれたロケットペンダントを取り出して、テーブルの上に雑に放り投げた。

「古代魔法の話だが、ただの噂ではないかもしれないぞ」

その言葉を聞いて、スミスたちは一瞬言葉を失った。

しかし少しして、スミスが鼻で笑う。

「はあ？ 古代魔法を使える冒険者がいるわけないだろ。何かの魔法を古代魔法だって言い張っているだけに決まっているだろ」

「まあ、そう言うな。もしも、その冒険者とやりあうことになったら、それを使え」

「……なんだそれは？」

スミスは机の上に投げられたロケットペンダントを見て、眉をひそめた。

「一時的に力を貸してくれるアイテムだ。使い方も教えよう」

「ずいぶんと親切なんだな……あんたはどこのもんだ」

スミスがじろつと睨むと、聖職者風の男はふつと小さく笑う。

それから、訪問者——マーカスは、協力者になるスミスに、少しだけ自分の正体を語るのだった。



ストーンゴリラン討伐の当日。

俺——ソータはサラさんとケルと共に、集合場所である冒険者ギルドへと向かっていた。

「複数のパーティでの依頼は初めてだから、少し緊張しますね」

俺がそう言うのと、サラさんが眉を下げて笑う。

「そうだね。良い人たちだといいいけど」

サラさんも不安なんだなど、その表情から察した。

元々、俺もサラさんもパーティメンバーから追い出された経験がある。

前のパーティではメンバーからあまりよくない扱いを受けてきたので、他の冒険者と接することに多少の苦手意識がある。

でも苦手だからと言って、いつまでも他のパーティと関わらないわけにはいかない。

「B級パーティとして長年やっているパーティもいるみたいですし、大丈夫ですよ。ねえ、ケル？」

俺はサラさんを元気づけてから、ケルにも話を振る。

「ふむ、楽しみである」

そう言って、ケルは機嫌よく尻尾をフリフリさせている。なんでか分からないが、今朝から嬉しそうだ。

ケルがこれだけ上機嫌となると、彼が好きな「愚かな人間」と出会う可能性があるってことなのだろうか？

俺が嫌な想像を膨らませていると、ケルが何か思い出したようにパツとこちらを向く。

「ソータよ。すまないが、今日はケル小隊は来られないのだ」

「そうなんだ。大丈夫だよ。元から、俺たちだけで受けようと思ってたしね」

正直、ケル小隊がいてくれた方が心強いんだけど、彼らがいると、俺たちのやる事がなくなってしまう。

「ケル小隊には周辺の見回りをさせている。少し気になることがあつてな」

ケルが遠くを見ながら言った。

「気になること？」

「ふむ。イエローベアーの群れの発生のようだが、他の所で起きていないか気になつてな」

ケルはそう言うと、視線を戻した。

どうやら、ケル小隊は街のために色々と働いてくれているらしい。

ケル小隊だけで行動しているのかと思うと不安になるけど、イエローベアーの群れを簡単に倒したくらいだし、危険はないだろう。

「ソータ。あれが、今回のパーティじゃないかな？」

「そうみたいです」

サラさんが示す方を見ると、冒険者ギルドの前に六人の冒険者がいるのが目に入った。

事前に聞いていた情報からすると、あそこにいるのが今回依頼を一緒に行う冒険者たちみたいだ。

俺たちは小走りでその冒険者たちのもとへと向かい、ぺこっと頭を下げる。

「すみません。最後になっちゃいました」

「申し訳ない。今日一緒にさせてもらうことになったサラです。彼がソータで、こっちがソータの使い魔のケルです」

俺に続く形でサラさんが挨拶を済ませる。

すると、温厚そうな男性がニコツと笑った。

「……いい度胸だ」

「え？」

表情と違って妙に冷たい声色に、俺は目をぼちくりとさせる。

温厚そうな男は咳払いをして、そのままの表情で続ける。

「俺はスミス。そっちがアリサと、タリンだ」

「は、はい。よろしくお願いします」

「……」

俺は頭を下げたが、アリサさんとタリンさんは何も返してこなかった。

スミスさんは戸惑っている俺の肩を強くトンツと叩く。

「とりあえず、馬車の乗り場に向かう。話はその後でしようか」

スミスさんの言葉を聞いて、アリサさんとタリンさんが動き出した。

それから、その後を追うようにもう一つの三人のパーティが続く。そのパーティは通り過ぎざまに俺たちに申し訳なさそうな目を向けた。

俺たちもそれに続いてスミスさんたちの後を追う。

「もう一つのパーティと自己紹介ができなかったね。スミスさん、相当怒っているのかな？」

「そう、ですね。待たせすぎちゃったんですかね？ 集合の時間に遅れたってわけでもないと思うんですけど」

サラさんの言葉に頷いて、俺はそう答えた。

この場に來たのは俺たちが最後だったが、集合時刻よりも早く着いたはずだ。

だから、挨拶を無視されるほど怒られるいわれはない気がするんだけど……

すると、ケルが嬉しそうに顔を上げて俺を見る。

「ソータよ。今回の依頼では、支援魔法を使うのは我らだけに限定しておいた方がいいと思うぞ」

「え？ ケルがそう言うってことは、もしかしてあの人たちって……」

「フフフツ。やはり、我の目に狂いはなかったようだ」

ケルは目を輝かせてそう言うのと、尻尾をフリフリさせた。

こんなに喜んでいってことは、あの人たちってケルの大好きな愚かな人間ってことだよな？

横目でちらっと見ると、サラさんはなんとも言えない表情をしていた。

スミスさんたちはどんなタイプの愚か者なのだろうか。

これまで接してきたケルが言うところの愚か者たちを思い出して、少し気が重くなった。

乗り場に着いた俺たちは、馬車に乗り込んでストーンゴリランの討伐に向かうことになった。

馬車はスミスさんたち『飛龍の翼』で一台。俺たちともう一つのパーティで一台の計二台で向かうことになった。

馬車が走り出す前にもう一つのパーティに挨拶しようすると、彼らは慌てた様子で「しー！」と人差し指を立てて、俺に静かにするように言った。

俺はあまりの剣幕に驚いてしまう。

馬車がゆっくりと動き出してしばらくすると、正面に座るパーティは顔を安堵する（あんど）ように大きなため息を吐いた。

ん？ 何かに怯（おそ）えているのか？

すると、中央にいた男が俺の視線に気づいて顔を上げた。

「おっと、そうだった。まだ自己紹介ができいなかったね。僕はオウラ、そしてこっちの女の子がローエで、彼がゾーア」

オウラさんは両隣に座る二人を紹介してくれた。

二人が頭を下げたので、俺たちも同じようにお辞儀（じぎ）する。

あれ？ なんかオウラさん、さっきよりもフレンドリーな気がする。

俺がそう考えていると、ローエさんが頬を掻く。

「さつきは仲裁できなくてごめんね。仲裁すると余計に酷いことになりそうだったからさ」

「いえ、俺たちが遅く来たのが悪かったと思うので」

俺がそう言うと、ローエさんは眉をひそめて首を横に振る。

「違うよ。スミスさんたちはわざと早く来るの。新人の子たちに罪悪感を持たせるためだけにね」

「え？ 罪悪感を持たせるために？」

俺は瞬きしながら首を傾げる。

一瞬間の間違ったのかと思ったが、どうやらそうでもないみたいだ。

「え、なんでそんなことをするんですか？」

「新人いびりがしたいだけなんだよ。あの人たちは」

俺の質問に答えたゾーアさんが、呆れた様子で眉間にしわを寄せてため息を吐いた。

その表情を見て、なんとなくこれから先の話を察してしまった。

これって、スミスさんたちがヤバめの人ってことだよな？

そう考えていると、ケルがぴょんと俺の膝の上に座ってゾーアさんを見上げる。

「詳しく聞かせてくれないか？」

「うわっ！ え、犬が喋った？」

「私のことはいいから、その愚か者について教えてほしい」

ケルは尻尾を振りながら、招き猫のように前足を器用にいくいくと動かす。

「か、可愛いつ」

ケルの仕草を見たローエさんは、表情を緩めた。

ローエさんに頭を撫でられながら、ケルはゾーアさんをちらちらと見る。

「そんなに見なくても教えてやるって。まあ、一部では有名な話だからな」

ゾーアさんはそう前置きしてから、スミスさんたちについて教えてくれた。

ゾーアさんの話によると、スミスさんたちは長くB級冒険者をやっているらしい。

冒険者ギルドに対しては真面目な態度なんだけど、裏では若手の冒険者に嫌がらせをしているとか。彼らのせいで冒険者をやめてしまった人もいるらしい。

「ずいぶんと酷いことをするんですね」

話を聞き終えて、俺は以前所属していたパーティのリーダーだったオリバのことを思い出した。

オリバたちは殉職金目当てで俺を追放したけど、スミスさんたちはただ憂さ晴らしをしているだけみたいだ。

俺の隣のサラさんも眉間を寄せている。

「さすがに許せないね。冒険者ギルドに報告した方がいいんじゃないかな？」

昔いたパーティのことを思い出したのか、サラさんの声色から怒りの感情が漏れていた。

サラさんの言葉を聞いて、ローエさんが困ったように笑った。

「いやー、それがなかなか難しくて」

「難しい？」

俺が首を傾げると、オウラさんが言葉を継ぐ。

「そんなことをしたら、後で何をされるか分からないんだよ。まあ、傷が癒えた今なら、報告してもいいかと思えなくもないけど」

「傷って……オウラさん、何かされたんですか」

「僕だけじゃないよ。若手でB級に上がっている人たちは結構被害に遭^あっていると思う」

オウラさんは力なく笑うと、ケルが不思議そうに口を開く。

「ふむ。それほどのことをした奴らなら、今回のような複数のパーティでの依頼を受ける際に、奴らの名前があれば皆避けるのではないか？」

「本当は僕たちも受けたくはなかったんだけど、仕方なくね。ギリギリB級に上がった僕らにしたら、この手の依頼はおいしいんだよ」

オウラさんはケルを優しく撫でてから、スミスさんたちの名前があるのに依頼を受けた理由を教えてくれた。

冒険者は冒険者ランクに見合った依頼を一定期間内に決められた数受けなくてはならない。そして、その依頼の難度はB級から一段と難しくなるらしい。

その際、今回のように複数パーティでの依頼でも、依頼を達成すれば実績の一つとして換算さ

れる。

一パーティで依頼を達成した場合も、複数のパーティで依頼を達成した場合も、評価はそこまで変わらない。そのため、必然的に複数のパーティで行う依頼は人気になるらしい。

一人当たりの取り分は減るが、規定の依頼数を稼ぐのには向いているからだ。

そこまで話して、オウラさんが隣にいるローエさんを見た。

「あの人たち、いつも一番に依頼を取るんだよね」

「聞いた話だと、新人パーティに張り込みをさせているみたいよ。依頼が貼り出されたと同時にスミスさんのところに持っていくかないと、酷い目に遭わされるんだって」

ローエさんがため息まじりにそう言った。

どうやら、俺たちが思っている以上にスミスさんたちは酷いらしい。

オウラさんが申し訳なさそうに続ける。

「どうやら、今度は君たちに目をつけたみたいだ。なんとかフォローしてあげたいんだけど――」

「いや、何も問題あるまい」

オウラさんの言葉を途中で遮^{さへぎ}り、ケルはぱあっと笑って俺を振り向いた。

ケルがこれから何をしようとしているのか、顔を見れば聞くまでもなく分かった。

うん。スミスさんたちの行動は俺も許せない。

同じ新人パーティが被害を受けているのなら、なおさらだ。

そんなことを考えながら、俺はケルの頭を優しく撫でる。

「オウラさん。多分、今回の依頼が終わった頃には、少しはすっきりしているかもしれませんよ」

「すっきり？ どういうことだい？」

「大したことじゃありませんよ。ただスミスさんたちが、ケルの『大好物』だっただけです」

「「？」」

俺がそう言うと、オウラさんたちは揃って首を傾げた。

そんな三人の反応に対して、サラさんだけが笑っていた。

そう、俺とサラさんは知っている。

大好物を前にしたケルが、どんな行動をとるのかを。そして、その結果どんな結末を迎えることになるのかを。

それからしばらくして、突然馬車が停車した。

なんだろうと思っていると、オウラさんたちが顔を強張^{こわば}らせた。

「……嫌がらせの時間か」

「嫌がらせの時間？」

オウラさんの呟きに首を傾げていると、突然外から馬車が強く叩かれた。

「おい！ 早く降りろ！」

スミスさんの声に急^せかされて、俺たちは急いで馬車を降りた。

腕を組んで待ち構えていたスミスさんたちが、不敵に口角を上げる。

「ここからストーンゴリランがいる場所に向かう。道中現れた魔物は全てお前ら新人が相手をしろ」

「あつ、はい。分かりました」

そのくらいで済むならいいだろうと思って応えようと、スミスさんたちは目を見開いた。

あれ？ 何か変なことを言ったかな？

前にも馬車から魔物を守った経験があるし、そこまで大変なことではない気がするんだけど。

ちらつと視線を向けると、サラさんとケルは笑っているが、オウラさんたちは啞然^{あぜん}としていた。

しばらく言葉を失っていたスミスさんが、ハツとしてから続ける。

「……はんつ、返事だけは一人前だな。全てだと言ったのが聞こえなかったらしい……そういえばお前、古代魔法を使えるとか言っているんだってな。そんなバレバレの嘘を吐いて楽しいのか？」

スミスさんは睨みながら、俺の肩をぐつと押してきた。

馬車に乗り込む前に、俺とサラさんとケルには支援魔法を重ねがけしてある。

だから、少し押されたくらいでふらついたりしない。

スミスさんはそのことを知らないからか、顔を真っ赤にしながらくぐつと力を込めて俺を何度も押した。



「ふっ、くっ……ふんっ！」

あれ？ これ軽くじゃなくて、本気で押しているのかもしれない。

「えっと、古代魔法の件は嘘じゃありませんよ」

「は、はあ!? そんなことを言うのなら、ここで使ってみせろ！」

俺が平然と答えると、スミスさんは押すことを諦めたのか、今度は胸ぐらを掴んできた。

しかし、いくら踏ん張っても俺を動かせないのが面白くないらしく、何度も握り直している。

そんなスミスさんを見て、オウラさんがゾーアさんとローエさんにヒソヒソと話す。

「なあ……スミスさん、何してるんだ？」

「小突いたり、胸ぐらを掴んで揺さぶろうとしたりしてるけど、上手くできていないよな」

「え、子供を揺らす力もないってこと？」

オウラさんたちの声が聞こえたのか、スミスさんは耳まで真っ赤にしてなんとか俺を動かそうと頑張っている。

これ、俺が動いてあげた方がいいのかな？

迷っていると、サラさんがスツと動いた。

次の瞬間、彼女が抜き放った剣の切っ先がスミスさんの首元に突き付けられていた。

「スミスさん。あまり、仲間に手荒な真似はしないでほしいんですが」

「ん？ う、うわあっ！」

スミスさんは悲鳴を上げて倒れてしまった。気づかないうちに喉元^{のどもと}に刃を突き付けられていて怖かったらしい。

確かに、あれだけスムーズな動きで切っ先を突き付けられたら、驚くかもしれない。
まあ、さすがに転ぶほどではない気もするけど。

すると、そんなやり取りを見ていたタリンさんがハツとして一歩前に出た。

「お前、先輩冒険者に剣を向けるなんて、ふざけてんのか！ ん!?」

「初めに手を出したのはそっちですよ」

タリンさんが剣を引き抜こうとした瞬間、サラさんが距離を詰めた。そして流れるような動きでタリンさんの剣の柄付近に切っ先を向ける。

もしタリンさんがそのまま剣を抜けば、手が切れる位置にあった。

サラさんは最小限の動きで、激昂^{げききやう}していたタリンさんの行動を止めたのだ。

……サラさん、格好良すぎるな。

多分、彼女は俺の代わりに怒ってくれたのだろう。

嬉しいけど、サラさんに甘えてばかりいるわけにはいかない。

そう考えて、俺は彼女の腕に軽く触れる。

「サラさん、ありがとうございます。大丈夫です」

「そうかい？」

「はい。古代魔法を見たかっただけみたいですし、見せるくらいなら別に問題ないです。でも、何に撃とうかな……ん？」

サラさんが剣を下ろしてから、俺は辺りを見回して、ちょうどいい的^{まと}を探す。

すると、『魔力探知』に反応があった。

「ケル、魔力の反応があるね」

「ああ。こっちに複数向かってきているな」

ケルも近づいてくる魔力に気づいたようで、反応がある方に体を向ける。

俺が促すと、サラさんが剣を構えた。

「サラさん。あっちに六つの魔力反応があります」

「あっちだね。分かった」

俺たちの会話を聞いたスミスさんたちは、同じ方角を向いて目を細めた。

彼らは魔物たちが近づいてきたのを見て、ニヤツと笑う。

「ちょうどいい！ ほら、お前たちだけで魔物を倒してみろ！ 俺たち先輩に失礼な態度をとったんだ！ あとで泣きついてきても、絶対に手を貸してやらないからな！」

スミスさんは俺たちが泣きついてくると想像したのか、ゲラゲラと品のない笑い声を上げている。その隣でアリサさんとタリンさんが続ける。

「オウラ。あんたたちも絶対に手を貸さないでよ！ こいつらには、教育が必要みたいだからさ！」